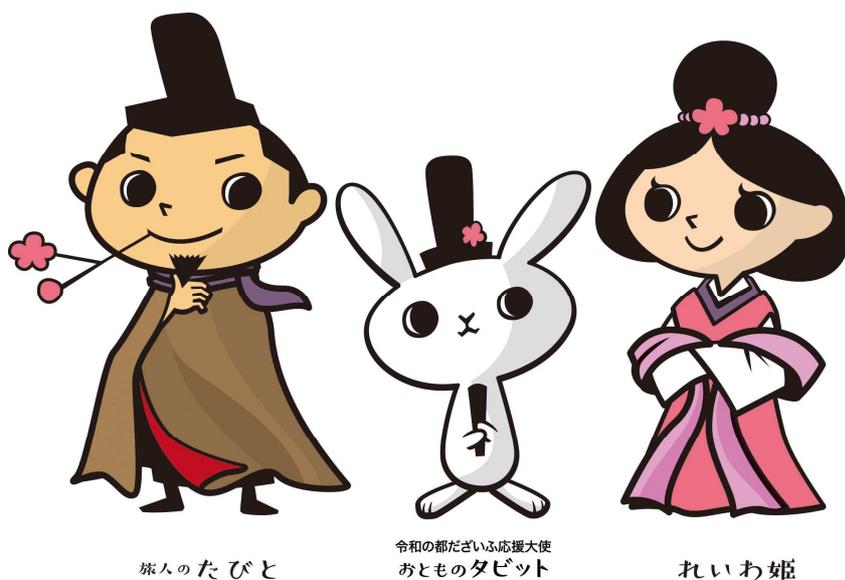


# 令和7年度 人権作品入選作文集



旅人のたびと

令和の都だざいふ応援大使  
おとものタビット

れいわ姫

太宰府市教育委員会

じんけんさくぶんにゆうせんさくひん しょうがくせい  
人権作文入選作品（小学生の部）

やさしい声かけ

しょうがくさんねん  
小学三年 木場 彩葉…… 2

わたしたちの地くをささえるおじいちゃん

しょうがくさんねん  
小学三年 佐藤 結南…… 2

ひとりひとり いのち たいせつ  
一人一人の命の大切さ

しょうがくよねん  
小学四年 平野 友萌…… 3

がいこく ひと なかよ  
外国の人と仲良くするために

しょうがくごねん  
小学五年 小野 颯太郎…… 4

じんけんとし とく  
人権都市の取り組み

しょうがくろくねん  
小学六年 尾崎 美月…… 5

じんけんさくぶんにゆうせんさくひん ちゅうがくせい  
人権作文入選作品（中学生の部）

おじさん

ちゅうがくいちねん  
中学一年 渡邊 もも…… 8

あのときのありがとう

ちゅうがくいちねん  
中学一年 木村 実奈…… 9

えずえぬえず  
SNSの世界

ちゅうがくにねん  
中学二年 伊藤 しずく…… 10

えいが つしままる  
映画「対馬丸くさようなら沖繩」を観て

ちゅうがくにねん  
中学二年 菊武 奏愛…… 11

みまも たい  
見守り隊

ちゅうがくにねん  
中学二年 西木 珠央…… 12

み くら さけ  
見えない裏の叫び

ちゅうがくさんねん  
中学三年 内藤 芽衣子…… 14

人権作文入選作品

(小学生の部)

## やさしい声かけ

しょうがくさんねん  
小学三年 木場 彩葉

わたしは、家ぞくの前では、大きな声でしゃべれるけれど、きんちょうしたときは、小さい声でしかしゃべれなくなってしまいます。

ある日のことです。わたしは、お姉ちゃんがわすれ物をしたときに、お母さんに、

「とどけられたらとどけて。」

と言われて、お姉ちゃんのわすれ物をとどけることにしました。

ところが、お姉ちゃんのクラスに行ったものの、きんちょうしてなかなか声をかけられなくて、教室の前で立ち止まってしまいました。どうしようと思っていた時、近くにいた友だちが、

「がんばって。」

と言ってくれました。その言葉でがんばろうと思えて、わたしは、やっと声をかけることができました。お姉ちゃんも気づいてくれて、ぶじにわすれ物をとどけることができました。

わたしは、友だちが声をかけてくれたことが、とてもうれしかったです。友だちの言葉でわたしも助けられたので、やさしい言葉をかけるのは、大切なんだなと思いました。これからわたしも、まわりの人のことを考えて声をかけていきたいです。

## わたしたちの地くをささえるおじいちゃん

しょうがくさんねん  
小学三年 佐藤 結南

わたしたちの地くでは、いつもおじいちゃんがみんなの通る道でまっすぐ通っています。それは、みんなが安全に通ることができるようになるためです。車やバイクが来たなら、

「車が来たよー。」

「みんな気をつけて行ってらっしゃい。」

と、大きな声でみんなに伝えてくれます。わたしが、登校におくれてみんなが通る道にいないくて不安なときも、自分の家の前でわたしに、

「まだみんな近くにいますよ。大じょうぶ。」

と、おうえんの言葉を言ってくれます。また、帰りのときも、わたしたちのことをえ顔でまっすぐにいてくれて、

「おかえり。」

と、言ってくれます。

ある日、わたしが、かぜぎみのときも

「大じょうぶ？」

と、声をかけてくれたり、たまには、大こんや野さいをくれたりします。わたしが、とうとう学校を休んだときも、

「大じょうぶだった？」

と、おじいちゃんのやさしさをもらいました。わたしは、毎日、おじいちゃんがいってくれるので、元気に学校へ行くことができますし、え顔になることができます。いつも地くをささえてくれておじいちゃんに、わたしもえ顔で明るいあいさつをして、おじいちゃんにパワーを送ります。

「ありがとう！おじいちゃん。」

## ひとりひとりの命の大切さ

小学四年 平野 友萌

今年、戦後八十年、戦争が終わった節目の年です、

わたしは、広島県に原爆がおとされた日、長崎県に原爆がおとされた日、そして、終戦の日のえいぞうを家ごとと見ました。えいぞうには、戦争で大切な人を亡くされた方が写っていました。どうして戦争をする必要があるのか、戦争をして、だれがとくをするのか、わたしはふしぎに思います。だからこそ、わたしたちが戦争のこわさやひとりひとりの命の大切さを知り、伝えていく必要があります。たかが一人の命ではなく、命は一人に一つの大切な命です。そんな大切な命を戦争でたやすくうばうのは、絶対にしてはいけないことだと強く思います。わたしのひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんは、戦争をけいけんしています。わたしが戦争について聞いても、答えてくれませんでした。それほど思い出すのがいやな出来事なのでしょう。戦争はたやすく人の命をうばってしまいます。戦争のこわさや戦争のおそろしさは、何年、何十年たってもかわりません。何年たってもかわらないので、当時はどれほどのことか、戦争のこわさやおそろしさは、これから先もずっと語りつがれると思います。戦争は、いっしゅんで何人もの命をうばいます。だからまた、戦争をくり返さないようにす

必要があると思います。戦争では、0才の赤ちゃんからお年よ  
りまで、年れい関係なくたくさんの方が亡くなられました。戦争で亡くな  
ってしまった方々の中には、戦争に関係のない方もたくさんいます。  
戦争でうばわれていい命など一つもありません。

しかし今も外国で戦争がおきています。わたしは、たくさんの方の命がう  
ばわれる前に、早く戦争が終わってほしいと思います。日本でおきた  
戦争でも、たくさんの方が、亡くなられました。だから、戦争について  
正しく学び、戦争のこわさやおそろしさを次の世代へと語りついでいく  
ことがわたしたちにできることだと思えます。世界でおきている戦争が  
一日でも早く終わり、多くの方々の平和な毎日が守られることをねがっ  
ています。

## 外国の人と仲良くするために

小学五年 小野 颯太郎

ぼくは以前、ニュースで、外国の人たちが日本のことを悪く言ったり、  
ごみをポイ捨てしたりしているのを見て、外国の人たちのことを悪く思  
いました。

でも、夏休みに広島に行つて考え方が変わりました。原ばくドームや  
平和記念館、宮島に行くと、ほとんどのお客さんが外国人でした。日本  
のことを知ろうとしていることがうれしかったし、日本のことが好きで  
来ていることがとてもほろしかったです。

福岡にもたくさんの方々が、観光に来たり、住んだりしているから、  
その人たちも、日本のことが好きで来ていると思えました。

それなのに、外国人が、日本人にさけられていたり、大切にされてい  
なかつたりする事があります。

ぼくの家族には、インドネシア人の友人がいます。ニサさんと言つて、  
明るくてやさしくて、料理上手な、大学の先生です。

ある日、ニサさんがアパートのエントランスのかぎをわすれて、同じ  
アパートの日本人に開けてもらおうと、五、六けんインターホンを鳴  
らしたけれど、だれも出てくれませんでした。アパートの管理会社の人  
も、助けてくれず、ニサさんはこまってぼくのお母さんに電話をしまし

た。それで、お母さんがアパートにかけつけて、代わりにインターホンを鳴らすと、エントランスを開けてもらえました。

アパートに住んでいる人たちは、外国人というだけで、ニサさんのことがこわかったり、文化がちがっておかしいと思ったりしているのかな、と残念に思いました。

ぼくは、人のことを、外見だけでどんな人が決めつけることはやめたいと思います。ぼくたち家族はニサさんとおたがいの国の料理を食べ合ったり、お出かけてしゅう教などの文化について話したりして、おたがいのことをよく知り、仲良くなりました。

だから、みんなが、色々な国の文化を知れば、外国の人のことを差別することが無くなると思います。

## 人権都市の取り組み

小学六年 尾崎 美月

私は人権都市宣言のことをもっと多くの人に広めることが大事だと思えます。そう思ったきっかけは六年生の初めに社会の時間で人権を尊重し、差別をなくすための取り組みについて教わったことです。

私は社会の時間である資料を見ました。その資料には「自分は今、人権が尊重されていると思いますか。」というアンケートがのついで、なんと、人権が尊重されていない人は多い時、約十四パーセントもいました。私は、今まで一度も気づかなかったけど、私達が住んでいる町で差別を感じている人がいると知ってとても悲しくなりました。

その後、市役所の方をお招きしてクラスのみんなまで太宰府市では差別を感じている人を減らすために、どのようなことを取り組んでいるのかを教えてくださいました。人権まつりや人権週間、人権講座ひまわりなどのいろいろな取り組みを行っていることが分かりました。私はその中でも特に「人権の花運動」という取り組みが心に残りました。

人権の花運動とは、小学生を対象とし、人権擁護委員と一緒に花を育てる活動です。人権の花運動を通して、子ども達の「命を大切にすることを」「やさしい思いやりの心」などを育ててもらおうことを目的に実施しているそうです。人権の花運動の花は「ひまわり」で、ひまわりの

はなごとは  
花言葉が「あなただけをみつめる」、「あなたはすばらしい」などであり  
「人権」のイメージに合うことからひまわりになったそうです。人権の  
花運動はどこでやっているか調べてみると、ここには私のかよって  
る学校で行っていたこともあり、おどろきました。私も、人権の花運動  
だけでなく、人権に関わるいろんなイベントに参加してみたいなと思  
いました。

わたし ださいふし  
私は太宰府市には差別をなくす取り組みがたくさんあることを知  
りました。だから、差別をなくすにはこのような取り組みをいろんな人  
知ってもらい、たくさんの人に参加していただくことが一番大事だとあ  
らためて思いました。

人権作文入選作品

(中学生の部)

# おじさん

ちゅうがくいちねん  
中学一年 渡邊 わたなべ  
もも

わたしはバス通学をしている。バスはいつも通勤・通学の人達で混雑して、身動きがとれないほどだ。

ある日、バスに一人のお年よりの方が乗ってきた。その日もいつものように、バスにはたくさんの方が乗っていて、座席はもちろんあいていない。優先席にも、もうすでに他のお年よりの方が座っていた。私は立っていたので、どうすることもできなくて、あたりを見回すと、座席に座った少しコワモチのおじさんと目が合った。ツーブロックの金髪で、大きいフープピアスのようなものを身につけていた。こわくて焦った。けれどもおじさんは、お年よりの方に手をむけて、笑顔で「あそこにいるお母さんよんでくれる?」

と言った。そしておじさんは席をゆずるために席を立った。それを見て私は心があたたかくなったのと同時に、こわそうな人だと勝手に思っ  
て申しわけなかったなと思った。また、バスに乗っていた他の人たちも、自然に笑顔になって、場が和んだのがとても印象的だった。けれども、席をゆずったおじさんの事をおどろいた目で見ていた人もいた。

「見た目で決めつけてはいけない」という言葉を聞くことが、最近とも増えた。けれども気づかないうちに見た目で決めつけているのかも

しれない。実際に私も、こわい見た目だから、性格もこわいかなと決めつけてしまった。しかし、それはちがった。お年よりの方に対して、「おばあちゃん」ではなく「お母さん」とよんだり、ゆびをさすのではなく指をそろえて手を向けたりしていたことがとても好印象だった。

そして、もし私がおじさんの立場だったらめんどくさがって、席をゆずらないかもしれない。「席をゆずるくらい簡単にできる」と思っていたけれど、目の前で見てみると、静かなバスの中で、いきなり知らない人に声をかけるのはむずかしい事なんだと気づいた。だからこそおじさんは、とても勇気があって心やさしい人だと感じた。しかも、その時の笑顔が自然で素てきだった。私だったら、緊張であんなに自然な笑顔はできないと思う。さらに、それがまわりにも広がっていったから、おばあさんと、おじさんだけではなく、バスに乗っていたみんなも良い気持ちになれたと思った。その後もおばあさんとおじさんが笑顔で話をしていたのを見て微笑ましいと思った。このできごとがあったその日は一日良い気持ちですごせたほど、心にのこっている。

これから先、私にもおじさんのような場面があったら、めんどくさ  
がらずに勇気をふりしぼって、席をゆずってみようと思う。けれども本  
当に勇気があることだし、「まだ年よりじゃないのに年より扱いする  
なんて失礼な人だな」と思われるのがこわい。だから、最近道徳で習  
った、「見えない親切」のような行動でも非常にすばらしいと思う。将来  
は、人に憧れられるような、やさしい心をもった大人になりたい。

# あのときのありがとう

ちゅうがくいちねん  
中学一年 木村 実奈

ある日、母といっしょに遠くのスーパーへ行った時のことです。私はいつものように買い物袋を持った母の後ろを歩いていました。

そのとき、店の前に一人の男の人が座っているのを見えました。年は三十代ぐらいでリュックひとつだけを持っていて、服も少し汚れているように見えました。私はなんとなく、その人を見て「ちょっとかわいかな」と思ってしまった。なぜそう思ったのか、自分でもよくわかりません。ただ、他の人と少しちがうように見えたからかもしれません。私たちが店に入るときも、出るときもその人はじっと座っていました。買い物を終えて外に出ると、その人の目が私と合いました。するとその人が、小さな声で

「すみません…」

と言いました。私はとっさに立ち止まりました。母も立ち止まって、「どうしましたか？」

と声をかけました。その人は、少しはづかしそうに、

「何日か食べていなくて…食べ物を買ってもらえませんか？」

と言いました。私はびっくりしました。こんなこと、テレビや本でしか見たことがなかったからです。母は少し考え、ちやうど買ってたおにぎ

りとお茶をその人に渡しました。するとその人は、深く頭を下げて「ありがとうございます、本当に…」

と言いました。そのとき私は、なぜか胸の奥がギュツとなりました。見た目だけでかわいと思ってしまう自分がはづかしくなりました。話してみると、その人はとてもやさしく礼儀正しい人でした。自分とちがう状況の人を、知らないうちにかわいと思いこんでしまう。そういう気持ちは知らず知らずのうちに人の心を遠ざけてしまうのだと気づきました。人権とは、すべての人が人間らしく生きるための大切な権利です。でも、それはどこか遠くの国の話ではなく、すぐ目の前の人たちにも関係していることなのだ、あの日実感しました。私は今でも、あのときの「ありがとう」の言葉が心に残っています。人を見た目や第一印象だけで判断しないこと。ちがいをこわがるのではなく、まずは知ろうとすること。それが、人を大切にするということだと思います。これから私は、誰かが困っているときには、すぐに助けることはできなくても、「どうしたの？」と声をかけられるような人でありたいです。そして、どんな人のことも、自分と同じ「大切な人」として見られるようになりたいです。

# SNSの世界

中学二年 伊藤 しずく

私は小学六年生のクリスマスの日に、スマホを買ってもらいました。私のスマホにはサイトやアプリ等の制限がかけられたので、自由にアプリをインストールすることはできません。でも、自分専用のスマホをもらえたことがすごく嬉しかったのを覚えています。制限がかかっていないアプリを使って楽しんでいました。

私が中学生になると、友達との会話でSNSについての話が増えってきました。私のスマホにSNSは入れられないので、いいな〜と思いつつながら話を聞いていました。私は、私も友達とSNSの会話をしたいな、なんで私の親は制限をかけるのかな、という気持ちでイライラしていました。親にも制限をなくして欲しいと頼んでも、なくしてはくれませんでした。

そんな風に不満を抱えていた時、友達との会話でこんな話がありました。

「ある友達が、SNSで冗談のつもりで誰かの悪口を書いたら、知らない人の間でそれが拡散されたんだって。そしてひどい言葉が書かれてるらしいよ。その友達は、『こんなことするつもりじゃなかった』って言うってたよ」

私は、親のせいで私が参加できなかった楽しそうな世界には、こんな怖い一面もあるんだなと知りました。今までイライラしていたスマホの制限は、私を目に見えない危険から守ってくれていたんだな、親は私を思ってくれていたんだなと分かりました。

SNSは、お互いに顔が見えないから、自分の言葉が相手にどんな影響を与えるのか、想像しにくいです。また、軽い気持ちで書いた言葉で誰かが傷ついてしまいます。このことに気づいたので、私はこれからスマホの使い方考え直そうと思います。

今、私のスマホにSNSは入っていません。しかし、将来SNSを使うことになるかもしれません。でもその時は、言葉を投稿する前に相手が目の前にいると考えて、本当に送っていいか確認してから投稿するようにします。画面の向こうには、心を持つ人がいることを忘れずにいたいです。

私は、便利で楽しいSNSの世界だからこそ一人ひとりが言葉に責任をもち、お互いを思いやるのが大切だと思います。

映画「対馬丸くさようなら沖繩く」を観て

中学二年 菊武 奏愛

みなさんは映画「対馬丸」を観たことがありますか？

この映画は太平洋戦争中の沖繩で実際にあったことがテーマとなっています。戦争が激しくなっていく中で一九四四年八月二十一日、沖繩から本土へ疎開する子どもたち約千七百人位を乗せたのが対馬丸でした。疎開というのは戦争が激しくなる中、子どもたちが安全な場所に避難をすることです。疎開のために対馬丸が出港した次の日の二十二日、船は米軍潜水艦に発見され、魚雷攻撃の末に沈没させられてしまいました。子どもたちの生存者はわずか五十九人でした。しかし、その事実は日本の軍部により闇から闇へ葬られました。助かった子どもたちも苦しめられたのです。その後、沖繩本土は米軍による沖繩本土への攻撃が本格化していったのです。

第一印象に残った場面は、子どもたちが船の上に出てきて海を見ているときにアメリカ軍の潜水艦の望遠鏡を見つけて、敵が近づいていることを大人に伝えなければいけない場面です。もし、子どももの言うことを聞いていたら助かったかもしれないと考えました。

この映画を観た後に沖繩の対馬丸記念館にいった方から話を聞きました。対馬丸記念館の中に展示してある「対馬丸の子どもたちからあな

たへ」というメッセージの話の話を聞きました。そのメッセージには

ときどきでいいのです

どうかわたしたちのことを思い出してください

あなたは海へ行くことがありますか？

海へ行って海の水にさわりますか？

その水は私たちのねむる

あの悪石島へとつながっているのです

と書かれています。

戦争によって戦争に直接かかわっていない人の命まで奪われてしまうこと、しかも大人ではなく子ども命までが奪われてしまうことは許されないことだと思えます。

他にも、沈没した時間が記録しているアメリカ軍が残した当時の記録の写真や対馬丸の船内を表した写真を見せてくださいました。

今も世界では戦争が続いています。そのなかでもウクライナとロシアの戦争は、三年以上いまだに続いています。

戦争をなくし平和な世界を創るために大切なことは何でしょうか？戦争によって奪われるのは「命」だけではありません。「夢」や「希望」なども奪われていきます。戦争によって得るものは何もないと言いき

ます。

今自分ができることは、戦争をするきっかけを少しでもなくすことです。例えばいじめをしない、相手のことを尊重するなど日常からあることをなくすことです。

戦争は最大の差別です。人間は尊敬されるべきだと思います。そのよ  
うな考えを世界中に広げていくことで戦争はなくせると信じています。

## 見守り隊

中学二年 西木 珠央

私の地域には「見守り隊」という人がいます。見守り隊とは地域の人  
が子どもたちの安全を見守るボランティアのことです。見守り隊の人は  
毎日、朝早くから通学路に立って来ています。そして旗を持って車を  
誘導してくれたり、横断歩道を渡っていいか確認してくれたりしてい  
ます。

私は学校で先生から

「地域の人や見守り隊の人に大きな声で元気よくあいさつをしまし  
よう。」

と言われていました。だから私は毎朝地域の人に大きな声で元気よく  
あいさつをしていました。

私が小学三年生のとき大雨で学校が休校になりました。しかし、  
私の両親は二人とも朝早くから働いていて学校から休校のお知らせ  
せが届いたときには家には二人とも居ませんでした。その日は、お父さ  
んと一緒に家を出ていて、帰りは学童にお母さんが迎えに来るので家の  
鍵は持っていませんでした。また、私はとても人見知りなので同じ班の  
人の家に行くこともできませんでした。だから、私は何十分も大雨の  
中、一人で班の人が来るのを待っていました。

私が待っているの見守り隊の人がわざわざ私の班の集合場所まで来てくれました。その人も休校になっていることを知らずに見守り隊に行ったらいいです。そして、さっき休校ということを経験からの電話で知ったばかりだったそうです。私かなぜ来てくれたのか気になって聞いてみると

「知らなくて今も待っている子がいるかもと思って帰り道までの間にある集合場所を見てまわっていたんだ。」

と説明してくれました。しかし私の班の集合場所はその人の帰り道までにありません。私が

「けど私の班の集合場所は帰り道までにありませんよね。どうして来てくれたんですか。」

と気になって聞いてみました。そしてその人は

「いつもあなたの登校の時も、たまたま会った時にもあいさつしてくれるからだよ。」

と教えてくれました。

その後、その人は、同じ班の人の保護者の方に私の両親に連絡してくれないかなど聞いてくれました。私はその人と同じ班の人の保護者の方のおかげで家に帰ることができました。

私は、前までは先生に言われていたから何となくあいさつをしていました。しかし、あいさつという人と人を繋げる魔法の言葉のおかげで、人とつながることの大切さを知りました。このように、私たちは地域の

中で温かく見守ってもらいながら生活することができています。私もこれから人のつながりを大切にして、一人一人が大切にされる太宰府になるように自分ができることをしていこうと思います。

# 見えない裏の叫び

中学三年 内藤 芽衣子

私は小学生の時に地元の中学校ではなく、中学受験をして地元とは少し離れた私立の中学校に入学した。たまに小学校の友達と会って、遊んでいたがそれ以外あまり関わりはなかったので地元の中学のことはその時まで知らなかった。しかし、数ヶ月前地元の中学校の体育大会を見に行った時、私はある子を見て驚いた。その子の容姿は金髪で耳に派手なピアスをつけていた。漫画やアニメでは見たことあるような中学生だけれど現実では初めてだった。しかもその子は、複数の先生に追いかけて回されていた。見たことない子だったけれど、その光景が私にとっては衝撃だった。私にはどうしようもなく、そのまま体育大会を見ていたがさっきのことが、頭の片隅から離れなかった。家に帰ってからも気になってしまい、これはよくテレビのニュースで報道されている未成年の非行というものかなと思ひ、インターネットで未成年の非行について調べてみた。すると、意外にも種類が多いと感じた。例えば、深夜徘徊、煙草、窃盗、万引き、飲酒などだ。未成年だから制限はあると思うが、改めて見てみるとたくさんの方が非行の一部だと分かった。先程話した子が非行かといえれば微妙だが、非行ではないかといえればそういうわけではないといえる。

でも、何よりも頭からも心からも離れないことは「非行」と呼ばれる行為をしている子は、ただ目立ちたいだけでなく、誰かに心の叫びを助けを聞いてほしいのではないだろうか。素直に聞いてくれて、こうなった自分を受けとめてほしいのではないだろうか。いろんなところでみかける「二十四時間、心の相談口」「いつでもあなたの声聞きます。」のような相談窓口がある。でも失礼ながらも、どうしても私は思ってしまう。本当にそれだけでいいの？と。もっと身近で素直に受けとめてくれる、頼れる人がサポートすべきなのではないのか、と。もちろん、ひとりひとり一人一人にそんな時間を使う必要はない、自分だって忙しいんだという大人や周りの気持ちも分からなくはない。だが、そうやって言い訳をしているうちに悩んでいる人たちの気持ちは大きくなり、そのうち爆発するだろう。そうやって、「非行」は繰り返されていく。悪循環だ。それなら、なにをどうすれば良いの？となると思う。私は初心に返ったらどうなのかと思う。まずは初心に返って、小学校の時にしたであろう、道徳の時間で習ったことを思い出せば良い。私は「相手を思いやる」「人を見た目で判断しない」の二つが一番印象的だ。人それぞれ思い返すことは違うと思うが、思い返したことがあるならば次に行動すべきだ。自分の身の回りのことからでも気にかかると思うし、それをみんなですべていくことによって社会は明るくなっていくと思う。

「非行」をしている子は、周りから白い目で見られやすい。でも決して違うのは、その子だけが白い目で見られるべきではない。周りも自分

たちが向<sup>む</sup>けている目<sup>め</sup>を態<sup>たい</sup>度<sup>ど</sup>を変<sup>か</sup>える努<sup>どり</sup>力<sup>りよく</sup>、変<sup>か</sup>えること<sup>こと</sup>が何<sup>なに</sup>よりも解<sup>かい</sup>決<sup>けつ</sup>方法<sup>ほうほう</sup>だ。

社<sup>しゃ</sup>会<sup>かい</sup>を明<sup>あ</sup>くするた<sup>た</sup>め<sup>め</sup>には、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>がで<sup>で</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>、で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>、と自<sup>み</sup>ら<sup>ず</sup>が<sup>か</sup>変<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>ろ<sup>ろ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>一<sup>い</sup>番<sup>ばん</sup>大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>う<sup>う</sup>。